

インフィニット・スト
ラトス ANNIHILATION
【凍結】

SYSTEM ZERO

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男は人間では無くなってしまった

Plus

それはそう呼ばれている

人体を限りなく強化し、機体性能に無理矢理追いつかせる手術

その最初で最後の完全体

そんな彼の復讐と殲滅の話

目次

始まり	1
アナイアレイター	16
完全武装	25
襲撃	33
イレギュラー	45
自由の剣と殲滅の執行者	53
暴力	73
寂しさ 愛おしさ	81
Satellite	88
ステータス	106
離れ離れの二人	112
オータム	122

学園祭	131
悪魔	141
忘却	157
REMEMBER ME	167
記憶	180
脱出	190

始まり

インフィニット・ストラトス

通称 I S

それはそう呼ばれた

篠ノ之束と言う1人の天才によつて産み出された「女性にしか」操縦出来ないマルチフォームスーツ

たった一機で現行の兵器を上回る性能を持つ I S は元々人類が宇宙へ進出した際の宇宙活動用の物であつた

しかし各国の政府やお偉方は、それは子供の夢だと言い、I S を認めなかつた

又、女性にしか扱えない欠陥品を使う気にはならないとも言つた

それに腹を立てた篠ノ之束は I S を何としても認めさせる為、ある事件を引き起こした

白騎士事件

篠ノ之東は世界各国の軍事ネットワークをハッキングし、そこから2000発以上のミサイルを日本に向けて発射

それを待機させていたISに全てを迎撃させただけでなく、捕獲しようとした各国の軍を人的被害無しで撃退

流石のお偉方もこれを見て黙ってなど居られなく、即軍事転用を決意

男性の軍人を解雇し、女性をメインの軍人とし、その育成機関も設立した

簡単に言えばISの登場により、男女平等の世の中から、女尊男卑の世の中へと変わってしまった。そのせいで妻や子供、職を失った男性の数は計り知れない

これは女尊男卑によって全てを失った者達に利用された男の復讐と殲滅の物語である

誰にも知られていない所謂秘密の研究施設

手術室の手術台の上には大柄の男性が寝かせられている

鍛え上げられた肢体は素晴らしい物で、検査によれば”適性”は今ままで最高の数値を誇るが、これまで数千人と失敗してきた為に、この男性が最後の希望であった

「これかね、今度の実験体は」

「はい、資料では元軍人だとか」

「軍人か……どうりで日本人にしては素晴らしい体つきな訳だ」

「数多くの死線を潜り抜けて来たのでしょうか」

「適性も高い、彼は必ず生まれ変わる」

「成功して、生きていけば、ですが」

「最後の希望、無駄にするわけにはいかないしな」

「そうですね」

「では、始めるとしよう」

手術台の光が強くなると7人の手術服を着た男性達が手術を始める
この世の中を破壊してくれるという希望を込めて

やけにおかしな任務だった

何故かは分からないが森の奥深くまで来いと

確かに、女性が優位に立ってからおかしな任務ばかりだが、逆らえばどうなるかは分かっていたから従った

指定された場所に着いたが、いきなり誰かに捕まった

首に何かをあてられ、そこから意識が無かった

意識を失って次に目が覚めたのは液体の中だった

突然、いつもと違う感覚が襲ってきた

何故か分からないが、壁の向こう側は見えないのに男性が3人居るのが分かった
何故だろう

それから数日後、首横に何かを埋め込まれた。抵抗しようとしたが、何故か何も出来なかつた。喋ることも

作業が終わって、やっと喋ることが出来た

ここは何処か、俺に何をしたのか

そう聞いた

返ってきたのは

「簡潔に言う。君はもう人間じゃない」

訳が分からなかった

何だよ人間じゃ無いって

俺に何をした

あれから数ヶ月が立った

もう何も感じなかった

最初はこいつらに対する殺意しか無かった

でも、日が立つごとに逆らえなくされて、良く分からない兵器に乘せられて、いや、
着せられた”の方が正しいか”

白ベースに青と赤、黄色のトリコロールカラーで構成されている人型の機動兵器

4、5メートルくらいで、V字アンテナに緑色のデュアルアイ、肩には大型の可動式複合武装型クローアームユニットが装備されていて、使用時には腕の前に展開される。クロー上部には速射可能な小型ビームランチャー、クローが開いた中央に大出力ビームサーベルが装備されている

又、ユニット後方にはブースターが装備されているので、格納時はメインスラスタールと連動して高機動戦闘が出来る

足には補助用のクローアームがある

そして、拡張領域と呼ばれる格納スペースに格納されている大剣、バスターブレード胴体が伸縮して現れる無砲身砲1門と左右の胸部パーツが展開して現れる無砲身砲2門、計3門のエネルギー複合砲

機体各部の装甲が展開して内部の動力源を攻撃に転用する……確かあいつらはアサルトアーマーとか言ってたか……

俺はこいつと物理的に繋がる

首に埋め込まれたコネクターを通して

何でも、この機体にAMSなるシステムが組み込まれて居て、俺のコネクターと接続

する事でまるで自分の体のようにこいつを扱える様になるらしい

実際、こいつは俺の考えた事をタイムラグなく実行してくれる

因みに、最初に受けた手術はこいつの機体性能に振り回されないように俺の体をバケ

モノみたいに強化する手術だったらしい

全神経の光ファイバー化

脳内に小型リーダー搭載

全ての臓器を人工臓器へ置き換える

骨格の強化

人工血液の使用

筋肉をロボットに使われる様な高性能人工筋肉へ

首に機体を思い通りに動かす為のコネクター

こんな感じで、確かに俺はもう人間じゃ無くなったらしい

眠くなってきた

今日はもう寝よう

明日は最終試験

俺が使えるかどうか試すらしい

何に使うのかは知らないが、もうどうでも良い
好きにしてくれ

今更此処を抜け出そうとは思わない
どうせ誰も受け入れてくれないから

燃え上がる研究施設

その中心に佇むのは純白と青に赤の機動兵器

「何故……………だ……………調整は……………完……………壁……………だった……………は……………ず……………カハア！」

血を吐いて崩れた壁に寄りかかる男性の腹には大きすぎる穴が開いていた

近寄る白い悪魔

男の頭をクローで掴み、容赦なく握り潰す

飛び散る血潮

それが返り血となって白い機体にベツタリと張り付く

何故この様な事になったか

その話をする前に一つ。彼は決して暴走している訳では無いという事を、頭に留めておいて欲しい

事の発端は1人の研究者の発言だった

最終試験終了後に、

「少し休憩したらリミッターを全部外してみようか」

この発言が後に自らを滅ぼす事になった

まず、彼を自分達の道具にするに当たって、洗脳する必要があった。その洗脳装置を機体に搭載しているのだが、プログラムミスで機体のリミッターを解除すると同時に洗脳も解除されてしまう為、リミッターは外さない筈だったが、最高の力を見て見たいと言う好奇心からその存在を忘れたままついに解除してしまった

その結果がこれである

洗脳が解けた彼は自分をこんなバケモノにした怒りと復讐心から施設を手当たり次第に破壊し始め、研究者達を全て殺した

そして

「あれえ（。 3。 ）おっかしいなあ〜何でももう燃えてるんだろ」

突如響き渡る雰囲気合わない、楽しそうな女性の声
声の方へとゆつくりと振り替える悪魔

そのデュアルアイは真つ赤に染まっている

「ん？……誰だよ、お前」

「この束さんより早くぶっ壊すなんてさ、生意気な女だね」

篠ノ之束

ISの産みの親であり、ある意味彼がこうなってしまった元凶である

彼は文字通り男だが、束から見れば全身装甲タイプで顔が見えない為、操縦しているのは女だと思っっている

「返事くらいしろよ、この束さんが興味持ってやってるつてのに」

発言からだいたい分かると思うが、彼女は自分が認めた人間意外は認識しない。そこからへんを歩いているアリ程度の感覚でしかない

そんな束が話し掛けているにも関わらず返事は愚か、反応一つ見せないのは流石の束もイラつく

「だまるなつてー！」

痺れを切らした束が面倒くさそうに飛び掛かる

束は此処で行われている研究のデータ回収、及び機体の捕獲、研究施設の破壊を目的として来た

しかし、束でさえ此処で開発されているISの情報が掴めなかった為、わざわざ自ら確認に来たのだが、今日の前に居るのが恐らく此処で開発されていたISだろうと理解し、捕獲しようとする

因みに束は自分でも自慢しているが、生身でISの相手を余裕で出来る程で、本人は細胞単位でオーバースペースクだと言っている

悪魔はボツと突っ立っているが、束の手が機体に触れる瞬間、束でも追いきれないスピードで

背後に回り、後頭部をマニピュレーターで掴んで地面に叩き付ける

「なあ!？」

束は酷く困惑していた

自分は頭脳も身体能力も誰にも負けない

例え相手がISを装着していようと

その筈なのに

少し甘く見すぎた

そう思つて抜け出そうとしても、凄まじい力で押さえつけられて身動き一つ取れない
「何なんだよ……………お前え！」

唯一動かせる足を上に上げようとするが、悪魔の足に装備されているもう一つの手によつて押さえられる。これで束は完全に抵抗手段を失つた

「黙れ」

初めて発せられた声、それは間違ひなく男の声であつた 限りなく低い声が束に今まで感じた事の無い恐怖を与えていた

「男?!なんで?!」

恐怖もそうだが、ISを男が使っている

女性にしか反応しない筈の物を男が

今まで女性以上にどうでも良いと思つていた男に虐げられている

もつと彼を知りたい。そう思つたのは彼女がやはり女性だからだろうか

アナイアレイター

鈴木 達也 27歳 血液型はO型

鍛え過ぎて同僚からゴリラ扱いされるのと、顔が絶世のイケメンなこと以外普通の軍人

日本人ではあるが、産まれて間もなく両親が病死した為、旅行に来ていたドイツ人夫婦に拾われ、そこで軍人として育った

20歳の時、IS登場によって成り上がって来た女上官の好き勝手に左遷されかけたが、基地の最高司令官の男性によって回避、以降彼の下で働くが

23歳の時におかしな任務に就き、Plus研究施設の者によって達也が指揮していた小隊ごと連れ去られた

その後、強化手術を受けて最初で最後の完成品、完全体となる

その際、強化手術によって殆どの記憶を消された上に度重なる機体の試験によって温厚な性格から最終試験時には、邪魔な物は消すと言う程に変わってしまった

体にはナノマシンの改良タイプであるナノスキンがあり、強力な自己増殖、自己修復、環境適応進化能力を備えた原子レベルサイズの万能ナノマシン

これによって、肉体が原子レベルまで分解されてもナノスキンが一体でも生き残り、時間さえあれば完全に元通りになる、肉体年齢が―50歳程になる

そして、洗脳が解除された時は自分をこんなバケモノに変えた怒りと復讐心から目に付いた全てを破壊した

道中、かつての部下の死体を見たが、記憶が無い故に何も感じなかった
因みに、研究所内での識別番号は

Plus―3075

Plus―3075専用IS アナイアレイター

設計者 不明

世代 不明

型式番号 WB-9900-P-N

動力源 Hコジマエネルギー応用型核融合炉

ジェネレーター出力 計測不能

スラスタール出力 計測不能

装甲材質 ガンダニウムHcn

コジマ粒子

IS登場20年程前にPlus研究者が発見した物で、コジマ物質に一定の電流を加える事で発生する高エネルギー粒子であり、作り方によっては半永久機関になりえる

また、強力な攻撃、防御及び移動システムとしても転用可能だがその反面、長期間、広範囲に渡り環境汚染を引き起こしてしまう

無害化コジマ粒子

コジマ粒子の軍事転用最大の壁たる環境汚染問題を何とかしようとして13年もの月日を掛け、エネルギー量と電子機器の妨害能力を犠牲にして無害化に成功したコジマ粒子だが、エネルギー量が減ったと言っても8/10程度にしか減少しておらず、大成功

であつた

ガンダニウムHcnとは

まず先に、この世界のガンダニウムについて説明しよう

地球上のある一定の温度、気圧条件下によつて希に生まれる希少金属である

驚く程軽量でそれに反比例して高い防御力を誇る

アナイアレイターの装甲は元々、只のガンダニウムに無害化コジマ粒子を練り込んだ強力な装甲であつたが、そこに達也の体の中からコネクターを通してナノスキンが入り込み機体の内側からナノスキンに置き換えていった

その結果出来上がったのは

人が簡単に持ち上げられる軽さ

一枚の小さな装甲で大型レールガンの直撃を耐え

時間さえあれば完全修復されるという

ばくのかんがえたさいきょうのそうこう

である

これらの技術はP r i u s 研究過程で生まれた物で、この者達だけの技術である故に二度と作る事は出来ない

武装

ヒートワイヤー

対B T、対ミサイル兵器

掌部に6つの射出装置を備える文字通りワイヤー状の武器

B T及びミサイル兵器を瞬時に破壊する為の物で

射出されたワイヤーがまるでクモの巣が如く展開され、絡めとり電気熱を流して焼き切る事が出来る

又、6本各先端にガンダニウムH c n製の引つ搔ける為のパーツが取り付けてある

為、並みのエネルギーシールドや装甲であれば貫通する事が出来る

腰部格納式ビームサーベル

腰部パーツに格納されている小型ビームサーベルで、後述する大出力ビームサーベルが使用出来ない状態に陥った場合の予備として装備されている為、余り使う事はない

ストライククロウ

肩に乗っかっている大型複合兵装の一つ

大型のクロウアームで、ガンダニウムHcn製のクロウなので、剛性、攻撃力共に素晴らしいの一言に尽きる

因みに、これはこの複合兵装全てに言える事だが、兵装と腕はアームで繋がっており、展開すると前に出て、兵装内部のアームも同時に展開されリーチが2倍近くまで伸びる

ビームカノン

速射型の小型、高威力のビームカノンでストライククロウ上部に設置されている

大出力ビームサーベル

複合兵装の掌部から発生するビームサーベル

文字通り大出力で発生している為、どれだけシールドエネルギーが多くとも、一瞬で削り切る攻撃力を持っている

アトミックシザース

脚部太ももに装備されている補助クローアーム

敵を捕まえたり、機体を固定したり、小型のビームサーベルを持たせて4刀流で扱う事も出来る

ソニックスマッシュ砲

機体の胴体部、及び左右胸部パーツを解放して展開される3門の無砲身エネルギー複合砲

3門それぞれのエネルギーを複合させて放つこの機体の切り札の一つ

余りの威力故に反動も凄まじく、アトミックシザースとストライククローで機体を固定しなければまともに撃てない程

バスターソード

拡張領域に収納されている唯一の武器

ガンダニウムHc n製の物で切れ味、耐久性共に高い

アサルトアーマー

本機の持つ最強最大の攻撃手段

機体の全無害化コジマ粒子を圧縮、瞬間的に放出することで、大爆発を引き起こす
範囲も広く、その威力は核をも容易に上回る

だが、発動後一定時間はプライマルアーマーが消失し、無害化コジマ粒子を用いた攻撃の威力も下がってしまう諸刃の剣である
しかし、少しすればまた使用可能になる

注意

これでも機体には嚴重なりミッターが施されています

完全武装

「何故くつつく」

「何でもいいじゃん♪」

アナイアレイターを解除して患者服のような格好で研究者跡の通路を歩く達也の腕を束がぎゅつと抱き締めている

何故彼女が達也にくつついているのか
ざっくり言うとお惚れたのである

幾ら強化された体であろうと自分に勝つことはないと思っていたが、IS解除後にもう一度攻撃しようとして、赤子の手を捻るようにあっさり返り討ちにあつた

そのまま組み伏せられて、いきなりキスをされた

一瞬何が何だか理解出来なかつた束だったが、理解すると同時に、突然妙な安心感と幸福感に襲われ、口内に舌の侵入まで許してしまう

そして、自分からも舌を差し出し、絡ませ、お互いの唾液を交換し口が離れると、照明によって光輝く銀色の橋が出来上がり、崩れて行く

目尻に幸福感からくる涙を溜め、同時に息が荒くなる束

達也は束の唾液が付いた唇に舌なめずりをして再びキスをする

束の足は既にかくかくで、達也が肩を掴んで支えて居なければ直ぐに崩れ落ちて居た

だろう

だが

「んん?!」

達也は急に束の服のボタンを外す

「何を……?!」

何をするかと思えば

開いた胸元に顔を埋めた

「……………これが……………愛？……………理解出来ない……………」

今の達也に愛というのは理解出来なかった

記憶を消され、感情も怒り以外が消えつつある現状、束に感じた感情を確かめようと
このような行動をしている

その言葉を聞いた束は母性本能がくすぐられていた

「じゃあ……………もつと確かめて見る？」

そう言つて下着が見えるか見えなにかの瀬戸際でスカートを止める
「……………後悔するなよ……………」

そして色々あつて冒頭の状況にある

そのまま歩いて居るとあるものが目につく

3075用装備 収納室

と書かれたプレートがある部屋

衝撃でドアノブがねじ曲げられてしまっているので、殴ってドアを破壊し部屋に入る室内には大きすぎるクローゼットと壁にいくつも掛かっている重火器

達也はまずクローゼットを開けると、自分用に作られた服を身につける

因みに、彼の身長は脅威の3.36mである

大型のアナイアレイターに対応する為に強力な成長剤を投与し、ナノスキンで調整した結果である

服の上から、達也の口元から脛下まで隠れる防弾、防爆、耐火コートを着用する

そして、壁に掛かっている重火器を取る

壁に掛かっている物は以下の通り

M279 ライトマシンガン

ICS-1916 グレネードランチャー

PGM-ヘカート・II アンチマテリアルライフル

RL-BH-HD・RE・Ver ロケットランチャー

F I M | 9 2 ステインガーマイスイル

ステインガー以外はコートの中に隠せるように折り畳み改造がされている

因みに、全て普通の大人が持てばデカイ火器だが、達也が持つとおもちやの様に感じられる

勿論、達也が使えるようにある程度は大きめに作られているがそれでもおもちやである

「……………スゴイネ」

流石の束もこれにはこの言葉しか出なかった

「さっさと出る……………お前のアジトに案内してくれるんだろ？」

「おっと！忘れる所だったよ！それじゃあ出発！」

その言葉と同時に現れる大きな機械のニンジン

入り口とおぼしき場所が開き、中にどうぞ♪

と言う看板が立てられている

入ってみると見た目からは想像もつかない程広く、達也も楽々入る事ができた
そして、振動、浮遊感と同時にニンジンが空へと飛び立つ

数分して

「着いたよー」

束の声が聞こえる

(早いな……………)

そんな事を心の中で思い浮かべながら外へと出ると、既に格納庫らしき場所の中にお
り、束が

「ようこそ！束さんの秘密のラボへー！これからは達也君が住む場所だよん♪」

無駄に広いスペースが多いラボで、研究機材は全て揃っており、生活に必要な設備も
バツチりだった

達也は椅子の上に座ると

「そんな事はどうでも良い。とつとと教えろ、俺をこの体にした元凶を」

東が色々あつた時に言つた全ての元凶

それを聞き出す事しか、今の達也の頭の中には無かつた

全ては復讐の為に

襲撃

「亡国機業？」

「つて言つても何十年も前のだけどね」

「そんな奴らと俺に何の関係がある」

亡国機業

通称フアントムタスクと呼ばれる秘密結社のような物で、第二次世界大戦終戦から存
在し世界を裏から支えて来た組織

最初は世界経済の安定を裏から支援していた組織であったが、次第に上層部が過激な
者達へと変わり、戦争による経済を望み、戦争、紛争支援をする組織へと変わってしまった

そんな組織が産み出した一つのプラン

Plus plan

強化人間計画

1960年代前半からスタートしたこの計画は、紛争支援の人員を強化、同時に人員

不足を解消する為の計画だった

送り出した兵力を死なすこと無く帰ってこさせる、その目的の為に一人一人を超人的に強化しようとの計画で、人間に耐えられない外的要因にも耐え、病気すら克服させるしかし、その目的故に強化適合できるものが30年間、数えられる程度しか現れず、適合できても何らかの障害が発生してしまい、戦力としては使い物にならなかった

亡国機業の上層部は計画を破棄。今まで通りに支援する事を決定したが、プランの破棄を認めない者が全員離反

隠れて研究を続行

そして計画開始から約50年の歳月を掛けてやっと生まれた完全体が達也であった

そして研究者達は己の目的の為に達也を利用したのだ

ISと亡国機業の殲滅

その目的の為に

「ならそいつらを潰せば俺の目的は達成される訳だ」

「でもあいつらは上手く隠れてる。こっちから行くより、あいつらからちよつかいを出して来た時の方が良いよ」

「ならどうする?」

「簡単!今ちようど良いタイミングだし」

IS学園 上空

そこにはアナイアレイターが光学迷彩を使用して待機している

現在学園のアリーナは戦闘中で、束が指示するタイミングでアリーナのバリアシールドを破って侵入する事になっている

(織斑一夏に傷を負わせれば、その隙を突いて潜伏中の奴らが尻尾を出す………か………それは良いが、問題はイレギュラーの存在……束も知らない男が正体不明のISを持っていると……)

イレギュラー

想定外、不規則の意味を持つ言葉で、文字通り束にとって想定外な事が起きている

つ
アナイアレイターと似たようなフェイスパーツと青い5枚二組の計10枚の羽を持つ

(そいつの戦闘能力がどれほどか………場合によってはリミッターも外すか………)

考え事をしている所へ

「聞こえる?」

束の声だ。恐らく時間が来たのだろう

達也は気持ち切り替え戦闘モードにする

「ああ、聞こえている」

「おっけい！それじゃあね、本当は東さんの無人機でいっくん達の相手をさせるはずだったんだけど、今回は達也君に役割を変更しました！いっくん達を殺さない程度に相手してあげてね」

「了解………任務開始」

アナイアレイターは光学迷彩を解除すると、ソニックスマッシュ砲を露出させ、エネルギーギョーをチャージする

数秒後、黄色い濁流がアナイアレイターの腹から溢れ出す

濁流は一直線にバリアへと向かい、まるで何も無かったかのようにバリアを貫通してアリーナ内にダメージを与える

そのまま突っ込み、衝撃を引き起した

学園視点

「何?!」

中国の代表候補生の凰 鈴音がその声を漏らす

突如としてアリーナのバリアを貫いた黄色の閃光、そしてそこへと突っ込んで来た何

か

黒煙が上がり、中心の様子は確認出来ないが、ただ事ではないのは完全に分かってい

た

「何だ?!いきなり!」

隣に浮かぶ織斑一夏も同様の反応を示して警戒

する

ヒイイイイイ……………

何かをチャージする様な音

「……?!鈴!」

嫌な予感があった一夏は隣の鈴をお姫様抱っこで抱えながら急速離脱する

その一瞬後に、鈴が居た場所に閃光が走る

極太の閃光によつて黒煙が晴れ、その中心に佇むのは白く歪なISだった
腹と胸部のパーツが格納され、鼻と頬のダクトから排熱がされる

そして光る緑色のデュアルアイ

その目は一夏と鈴を捉えていた

「お前、何者だ」

「……………」

「答えろ！お前は何者だ！何が目的だ！」

「……………」

沈黙

それが彼の答え

話す意味ないし、そもそも話す理由が無い

「織斑君！凰さん！」

一夏の横に現れるディスプレイ

そこから教師である山田真耶の声とする

「今すぐアリーナから脱出して下さい！直ぐに先生達がISで制圧に行きます！」

普通ならそれが正しい判断である

だが、まだアリーナ内には避難中の生徒達が居る

一夏はおめおめと逃げる訳には行かないと思い

「いや、皆が逃げるまで食い止めないと」

「それはそうですけど……でも、いけません！織斑君！」

「一夏さん！」

「一夏！」

真耶の後ろで一夏の名を心配そうに叫ぶのは、上から、セシリア・オルコット
イギリスの代表候補生である

専用機はブルーティアーズ

そして篠ノ之箒

一夏のファースト幼馴染み

そして、束の妹でもある

「それで良いな？鈴」

「誰に言ってるのよ………ていうか！離しなさいよ！動けないじゃない！」

現在一夏は鈴をお姫様抱っこしている

勿論ISで

そんな事をしていけばパーツ同士が干渉しあつて動けなくなるのは当然であるし、
そもそも鈴自身が動けなくなる

「ああ、すまない」

一夏が鈴を離した後、再び閃光が襲う

二人は避ける為に左右に別れて行動し、その間をアナイアレイターが突き抜ける

急速反転し、振り向き様にヒートワイヤーを全て射出

回避行動へと移らせ収納する

その隙に一夏に接近

パススロットからバスターソードを取り出し上段に構え、振り下ろす
勿論一夏とて黙ってやられるわけもなく、雪片を横に構えて切り結ぶ

蹴りを入れて一回離脱しようと考えた一夏だが、まるでその考えを読まれたかのよう
に太もものクローアームで足を捕まえられ、動きを封じられる

「当たれえ！」

響き渡る声

遠方から隙を伺っていた鈴である

肩部に装備されている不可視で高威力、速い弾速が特徴の龍砲が火を吹くそれは背部に命中したのを皮切りに、次々と命中していく

一夏も離れてその様子を見ている

アナイアレイターの周囲を黒煙が支配し、突入時の様な状態になった

「やったか？」

「油断しちや駄目よ」

黒煙の中を確認しようと鈴がハイパーセンサーを索敵に絞ろうとしたその時

「何だ？これ」

一夏が疑問の声を上げる

「どうしたのよ」

「いや、これ」

そう言つて一夏が指す方向へと目を向けると

薄緑色の光が舞っていた

黒煙の中から

瞬間、待っていたかのように黒煙が晴れ、その中心に浮かぶのは

薄緑色の膜に覆われた無傷のアナイアレイターだった

イレギュラー

シールドエネルギーではない正体不明の膜に覆われ、その中でかすり傷一つ付いていない状態のアナイアレイターを見た鈴の驚きの声

「無傷?! そんなー!」

龍砲

鈴のIS、甲龍に搭載されている武器で、高威力のエネルギー弾を不可視の状態で速射することの出来る物

並のISのエネルギーシールドに直撃であればあつという間に削り切る事が出来る筈だが、目の前の防御機構の前では余りにも無力であった

達也視点

機体内部のUIに現れる情報を見る

高エネルギー体27発PAに全弾命中

PA減衰率19%

回復開始

35秒後には完全に回復

(流石……か)

鈴の放った27発の龍砲が全弾直撃にも関わらず、たったの19%しか減衰が見られない

プライマルアーマーがどれだけ異常な防御力を持つかは理解して頂けたらう

バスターソードをパススロットへと戻し、右肩のストライククローを展開
ブスターに明かりが灯る
小さな光が球体となり、弾けた

「ひっ?!」

鈴の目の前まで一気に接近

アナイアレイターの顔を間近で見た鈴はそのフェイスパーツに恐怖し、固まる
その決定的な隙を逃す筈はなく、クローで鈴の左肩の龍砲を掴む

徐々に力を込め、やがてパーツを握り潰す

火花が散り、爆発が起こって堕ちていく鈴と甲龍

すかさず急降下し、鈴を追い抜くと左肩のストライククローも展開
大出力ビームサーベルを起動

クロー掌部から緑色の光の刃が出現する

それを落下して来た鈴に向かって容赦なく振り上げ

叩き付けようとした時

「させるかよおー！」

叫んだのは一夏だった

無傷のアナイアレイターを見て唾然としていたが、鈴の惨状を見て我に返り守ろうと突撃してきていた

そのシオルダータツクルは見事に命中

白式の高い推進力を生かし、そのままアリーナの壁に叩き付ける

(速度だけならこいつに劣らないか、流石にアイツが作っただけの事はあるな…)

白式は仮にも束が作ったIS

近接攻撃力と推進力ならアナイアレイターに勝るとも劣らない

だが、嚴重に掛けられたリミッターと言うデメリットがあるうと
敵う事はない

右肩のストライククローを上にとけて白式の左側のウイングを右手で掴み、0距離で
ヒートワイヤーを射出する

ウイングの貫通と同時に内部機構が滅茶苦茶になり姿勢を保っていられなくなる白
式

それを逃さず左のストライククローで渾身の左ストレートをぶちかます

「ぐああああ！」

勿論墜落する白式

追撃の前にまずは援護を片付けるべきと判断し、もう一度甲龍に急接近

「来ないでえー！」

鈴は残った一機の龍砲にエネルギーを集中して迎撃するが、PAで無効化しながら大出力ビームサーベルを再び起動

今度こそ緑光の刃を叩き付ける

エネルギーシールドによる抵抗もほんの一瞬

一瞬でエネルギーが0となり絶対防御が発動

同時に鈴の意識も消え、機体の保持すら出来ず甲龍は光となって待機形態へと戻る

ISが無ければ人間が空に浮いている事は出来ない

落下する鈴

この高さからではどんな落ち方をしようが即死である

地面まであと数メートルと言う時

WARNING

高熱源体接近

突如として鳴り響くアラート音

レーダーに映るのは高速接近するIS

どのデータベースにも存在しない正体不明機

イレギュラーは落下した鈴を回収し、安全域まで運んだ後、此方へと戻ってくる

そしてアナイアレイターの上に聳える、白い機体

自由の翼を広げ、その威厳を示す

ZGMF—X10A フリーダム

この世界にアナイアレイター、達也と言う名の
自然イレギュラーが発生したのなら

意図されたイレギュラーが発生しても

何も可笑しくは無い

自由の剣と殲滅の執行者

何故フリーダムがこの世界に居るか

簡単に言えば転生者である

この世界とは別の世界において、事故で死んだ少年

大木 海斗

所謂特典にフリーダムガンダムを選んでこの世界に落とされた

「大人しく投降して下さい。でなければ、その機体を破壊します」

発せられた少年の声

それは言葉通り投降を促している

あれだけの性能差を見せ付けられて尚、此だけの余裕があるのはフリーダム
の性能故だろう。その性能はアナイアレイターを軽く超える

勿論投降など頭に無い達也はビームカノンの速射で牽制するが、大した動きをせず
かわされるものの想定内

移動先にビームカノンを発射、だが着弾寸前に恐ろしい運動性能で回避される

「最後の警告です。投降して下さい」

投降の意志が無いことを、クローを上を持ち上げて開く事で伝える

「話し合いが出来ないのは残念です。」

フリーダムはビームライフルをリアスカートに装備すると、サイドスカートからビームサーベルを抜き接近してくる

こちらも大出力ビームサーベルを起動し、相対する

斜め上から袈裟斬りにしようとするフリーダムに対し、アナイアレイターは横一文字に振りかぶり、サーベル同士がぶつかりあって干渉し、つばぜり合いが起きる

凄まじい閃光と音

両者が睨み合い、その力を込める

現時点で性能的にはフリーダムが勝っている

アナイアレイターの出力では足りず、とうとうその機体に傷が付けられた
右肩から左脇腹に掛けて走る傷

後退したアナイアレイターに休む暇を与えまいと今度は背後に回って切り付ける

背中にも大きな傷が出来、そのまま蹴られ、地面に落下して沈黙する

「すまねえ海斗、ありがとな」

降りてきたフリーダムに寄るのは気を失っていた一夏だ。

「大丈夫。あれじゃ仕方ないよ。それに、一夏も鈴を守ろうと頑張っただろ？ 誰も何も言わないよ」

何も出来なかつた一夏の悔しさを慰めるように話す

「そう言えば、鈴は?!」

「心配無いよ、先生達が医務室に運んで行ったから」

その言葉と同時にアリーナ内に入ってくる教師部隊 I S 6 機

「大木君！織斑君！後は先生達に任せて、休んで来て大丈夫ですよ！」

沈黙したアナイアレイターを囲みつつ休むように伝える山田先生

「じゃあまた後でな」

「ああ」

海斗と一夏も別れてピットに向かう

システム再起動

各セクションチェック

右肩部から左脇腹部に掛けての損傷を確認

背部にも損傷を確認

稼働に問題無し

領域離脱の為に、存在する敵機の殲滅を推奨

認証確認

リミッター第二段階まで解除

F及びNシステム起動

ジェネレーター出力上昇中

G—T—X待機OK

ベルフエゴールスタンバイ

敵ノ殲滅ヲ最優先トスル

突如起き上がるアナイアレイター

「まだ動けたの?!」

た
その言葉を発した一人の女性教師はマシンガンを構えるが、次の瞬間には意識が消え

その惨状を見ていた他の教師は全く動けなかった

名前に似合わない真っ白な機体にべつとりと付く返り血

アナイアレイターの手には先程の教師の生首が握られていた

血だまりの上に立つ姿はまさに殲滅者の名に相応しいと言える

空を見上げたかと思えば、ギロリと他の教師の方へと目を向け

またしてもその意識は消えた

皆何が起きているのか分からなかった

一瞬にして教師部隊が二人も殺られた
僅かな抵抗すらさせて貰えずに

分かるのは結果だけ

今回は手刀によって首が飛ばされた事

更に赤く染まり、最早恐怖と気持ち悪さから直視出来ない者が殆どだった

「止めろ！」

飛んで来たのはフリーダム

羽根に収納されているバラエーナプラズマ収束ビーム砲で攻撃するが、プライマルアーマーで無効化され、ビームカノンと言えない程出力が上がったビームカノンで反撃する

ラミネートシールドで防ぐも、耐えきれずに破壊された

空いた左手でビームサーベルを抜き

ビームライフルで牽制しながら近づいてサーベルを振るが、手首を掴まれガラ空きの腹に手刀を差し込まれる

本来、フリーダム装甲はフェイズシフトと呼ばれる物理攻撃に対してはほぼ無敵の装甲だが、アナイアレイターの機体表面のナノスキンがフェイズシフト装甲を侵食し、物理攻撃である手刀の貫通を可能としている

そのままストライククロウで頭を掴み、潰そうとしたが

「ぐっ……く……あぁ……」

頭を抑えて呻き声を上げる達也

「…何故……いきなり………クソツ！………がああ……うぐう………」

フリーダムを離して上空へと上がると背部装甲を展開

内部の大型ブースターにエネルギーを送り

凄まじい轟音を立てて離脱していった

「……………終わった？」

「急に………どうしたんだ………」

何とか凌いだ

やっと終わった

皆がその感情を抱いていたが、たったの一機に教師が2人も「殺された」

この事実は学園にも、他の国にとっても大きくのし掛かった

束のラボ

「束様！」

「どうしたの？くーちゃん」

PCを弄っている束を呼んだのはクロエ・クロニクル

束がドイツのある研究施設を襲った時に保護した少女である

因みに名前は束が付けた物

それはともかく焦っている様子

「達也様が帰ってきたのですが、酷い頭痛を訴えていて…」

「どこかに居るの?!」

「今、格納庫に……」

「直ぐ行く！」

クロエは長く束と共に居るが、束があそこまで焦っているのを見た事がなかった
「恋……でしようか……」

格納庫

「ハア………ハア………がああ……ぐうう………」

「達也！大丈夫?!」

格納庫に着くや否や呻きを上げて壁に手をついて歩いて居る達也を見つけると彼のそばに寄る

「どうしたの?!」

「ああ……………ハア……………ハア……………東……………ああああ……………」

床に倒れ込んでしまう達也

「大丈夫だよ、達也……………安心して……………」

何とか達也の痛みを和らげてやろうと抱き締めて頭を撫でてやるが、余り効果は無く次第に壁に向かって頭をぶつけ始めた

「やめ……………ろ……………ぐっ……………おれ……………の……………ああ……………」

東はその達也に向かって

「んっ……………」

キスをした

「……………んん！む！んん……………」

背中をさすりながらゆつくりと慰めるように

ゆつくりと

格納庫の天窗から入る夕焼けの光もあつてその姿はやけにロマンチックだった

数十分後

日は落ちて辺りは月の光に照らされていた

「安心した？」

「すまない……………あんな……………見苦しい所を」

頭痛が引いてきた達也は束に謝るが

「謝るんだつたらまずはご褒美を頂戴？ 勿論コツチの……………ね？ 今日の事はその後で良いから」

「そんなので……………良いのか？ 俺にはわからない」

「良いんだよ………さあ………来て？」

先のロマンチックなシーンから一転

月の光もあつてエロティカな雰囲気へと変わっていた

月光の下で二つの影は混じりあつて一つの影となり、愛を確かめ合つた

暴力

Fシステム

正式名称はフラッシュシステム

アナイアレイターの制御系に組み込まれているシステム

パイロットの脳に直接アクセスし、生体CPUとして扱う

それ故に強化されていない人間はアクセス段階で送られてくる膨大な情報量に脳が耐えきれず死ぬ

この他、あるものを遠隔操作する事も出来、あるシステムとも接続が出来る

Nシステム

正式名称はニュータイプシステム

人の殺意や敵意に過敏に反応するシステムで、相手の負の感情をパイロットに見せる

事で破壊衝動を促す

これもパイロットの脳に多大な負荷を掛ける為、強化されていなければ死ぬ

又、このシステムは死んだ人間の残す最後の思い
残留思念も受け取り、パイロットに見せてしまう
達也が急に苦しみ出したのはこれが原因

アナイアレイターのリミッター

アナイアレイターは文字通りこの世で何者も勝つことが不可能な程の性能を誇る
過剰過ぎる力を安定して制御する為に研究者達が設定したもの
万が一の時は解除出来るようにされており、リミッター自体は段階的に設定されてい
る

第一段階解除

機体の基本性能の向上

シールドエネルギー及び絶対防衛消失

第二段階解除

ジェネレーター出力30%上昇

オーバーロードブーストの解放

機体の追従性能45%向上

第三段階解除

ジェネレーター出力50%向上

アサルトアーマーの攻撃力が50%向上

プライマルアーマーの防御力が50%向上

第四段階解除

機体性能が全体的に70%向上する

AMS接続深度Lv2へ

第五段階解除

機体性能90%向上

機体追従性能70%向上

全リミッター解除

機体性能を限界以上まで引き上げる

A M S 接続深度 L v 3 へ

全システムの解放

ナノスキンの異常活性による機体修復能力の大幅な向上

H コジマ粒子の異常活性によって攻撃力、防御力、機動力 5 0 % 向上

アサルトアーマーの性質変化

通常のアサルトアーマーは“H コジマ粒子を圧縮し”放出”するが、変化した場合大規模圧縮に加え”解放”するようになる

これによって範囲は狭まるものの、攻撃力は5倍程まで上昇する

勿論こんな事をすれば粒子がほぼ無くなってしまい、使用後数十分間はH コジマ粒子を用いた全ての行動が不可能となる

銃火器について

M 2 7 9 ラット

ライトマシンガンであるM 2 4 9を達也用に改良したものの銃身の大型化とバイポッドを一つ増設

コートに隠せるように中折れ式になっている

それ以外は基本的にM 2 4 9と変わらない

I C S — 1 9 1 6 ハンター

研究者オリジナルのリボルビンググレネードランチャー

形はM 3 2と余り変わらない

口径5 5 m m

装弾数7発

銃身長 520 mm

有効射程 520 m

連射速度 24 発／分、4 発／秒、5 発／秒（速射）

これもコートに隠せるよう、中折れ式になっている

PGM・ヘカートII

中折れ式に改造されている以外そのまま

RL-BH-HD・RE・Ver ロケットランチャー

専用特殊ロケット弾を発射するランチャー

見た目だけはバイオハザードリマスターの無限ロケラン

口径 90 mm

装弾数 6 発／薬室 1 発

銃身長 126 cm

有効射程 4600 m

最大射程 5000 m

弾速 1860 m / 秒

専用特殊ロケット弾

先端内部にエネルギーシールド干渉装置が内臓されており、エネルギー感知後目標 2 m 前で先端が開いて装置が露出し、エネルギーシールドに干渉して停止させる

FIM-92 ステインガーミサイル

変更は無し

M61 スピットアウト

戦闘機に搭載される 20 mm 6 連装バルカン砲を達也用に改造したもの

ベルト給弾方式で 18 万発入りのガンダニウム合金製巨大箱型弾倉を背中に背負って使用する

全体がガンダニウム合金製の為、元の M61 より圧倒的に軽く、耐久性も圧倒的
毎分最大 1 万 8000 発の連射力を誇り、十数分で弾倉が空になる連射性能と 20 m

る mの攻撃力は、通常兵器ながらもISのエネルギーシールドを数分で削りきる事ができる

因みにこのM61は研究施設を離れる時に偶然束が見つけた物

寂しき 愛おしき

達也は今夢の中に居た

まだ20未満の自分の前を無邪気に走っていく誰か

輪郭すらはつきりせず、ただ影の様に映るその人を知っている気がして手を伸ばしても、すり抜けてしまう

そして離れていく

「待て！お前は?!待ってくれ！」

叫んでも止まってはくれず、辺りは光に包まれ

「ハッ?!」

場面がいきなり変わって寢室

裸の自分とその上にかかっているシーツが、ここは現実だと伝えている
「夢……………」

「あつ、起きた？」

ボツとしていた達也に話し掛けるのはシャワーから出た束
バスタオルで濡れた体を拭いており、当然裸である

その姿はとても幻想的だった

整った綺麗な顔立ちに艶のある美しいロイヤルパープルの髪
真っ白と見違える程白い肌にくくよかな双丘

引き締まったくびれと安産型の美尻

太くも細くもない、バランスのとれた腿

膝から下は人形のような細さでありながら、力強さを感じる

「どうしたの？ そんなにまじまじ見られると……ちょっと……」

白い頬をほんのりと赤く染めて話すその姿は非常に愛らしいが、この姿は達也以外の誰にも見せられることは無い

当たり前であるが、他の有象無象がそれを、愚かにも目の前で願おう物なら、自分が気づかぬまま殺される

「……………こつちにきてくれ」

何時もより、弱々しい声で頼む彼に違和感を覚えた束は直ぐ様ベッドへとあがる

達也は束が上がってくるや否や彼女を抱き締めた

身長150と少しの束を300越えの達也が抱き締めているその姿はさしずめ、美女

と野獣のようである

「夢を見た」

「？」

「誰かが、誰かが俺の前を走っていた。だがその人に触れようとしても、触れられなかった。真つ黒な影のような人で、輪郭も、何もかもはつきりしていない……この感情が分からぬ……いや、分からなくなってしまった。少し前まで、理解出来ていたのに今ではもう、分からない。こう言うのを何て言うのだったか……それさえも忘れた。今の俺はカラッポだ……但、魂があるだけの人形だよ」

度重なる戦闘訓練、学習によって楽しむ事も、悲しむ事も、喜ぶ事も誰かと共にありたいと言う願いも、殆どを失った

残るのは世界と亡国に対する激しい憎悪と怒りしか無い

度々行う束との行為すらも、彼にとっては失った何かを埋める為の事でしかない

束はその話を黙って聞いていた

彼の胸板に顔を埋め、その心臓の鼓動を聴きながら。静かに、受け止めるように

「何故お前は俺と共に居る。何故カラツポの俺を愛してくれる。何故、愛の無い行為を受け止めてくれる。何故、何も言わずに聞いてくれる」

ずっと思っていた疑問

こんな自分を一途に愛してくれる人

何故なのか

「ん……」

重ねられる唇

今までの情熱的なモノとは違い、鳥の啄みのような優しいキス

「一目惚れしちゃったから」

但一言

その一言は達也にとっての最大の救いだった

頬を伝う生暖かいモノ

「涙?……俺が……泣いている……う……」

手のひらに小さな水溜まりを見た後、急に視界がぼやけていく

「ああ……ああ……ああ……うあ……」

押し留められていた感情の喪失と言う名のダムが、一時的に崩壊した

「うあああああああ!!!」

滝のように零れていく涙

「よしよし。今はたつぷりと泣いていいんだよ……達也」

溢れ出す悲しみと流れてくる暖かさ
そして愛しさ

理解出来なくとも、達也は今、しっかりとそれを感じていた

Satellite

束との一時を終えた翌日。達也はコートの中に札束を入れて何かの準備をしていた
「どこ行くの？」

何かのコンソールを操作していた束が手を止めて紅茶を飲みながら質問をする

「少しの間ロシアへ飛ぶ」

「何しに？と言うかその格好で大丈夫？」

ロシアと言えば当然寒くて有名である。しかし日本との季節差は余り無く、春夏秋冬
向こうが1ヶ月程度遅い

細かく言うると日本の夏のピークが6月から8月なのに対し、ロシアは7月から9月で
ある

現在は4月の終わり

つまりは向こうはまだ冬気が抜けきっていないのである。
が

「寒さも暑さも、感じるのは忘れた」

サングラスを掛けながら静かに放たれる言葉は深く、暗いものだった

「ごめん……私は、一緒に居た方が良い？」

「直ぐ戻ってくる。大丈夫だ」

「わかった……気を付けて、ね」

格納庫でアナイアレイターを纏うと、それに合わせて束がハッチを開く

重い音を立てて開いていくと同時に眩しい朝日が差し込んでくる

それはまるで、暗闇の中の彼を照らすように

体制を低くし、ブースターに火を入れる

脚部をカタパルトに接続されると同時に天井から下がるカウントパネルが光る

W B | 9 9 0 0 | P | N | A N N I H I L A T O R

T h e r e a r e n o o b s t a c l e s

R e a d y f o r i n j e c t i o n

C o u n t d o w n

3

2

1

GO!

一切大きな音と共に点火

同時にカタパルトも起動し、火花を散らしながら凄まじい勢いで前へと進む。射出口に到達し、カタパルトが離れると同時にブースターの出力を全開にして飛び立つ

目標はPlu s 研究所ロシア支部の殲滅とそこにある”Gピット”の強奪

リミッターを一時解除し、オーバードブーストを起動

コジマ粒子を収束し、爆発させる事で驚異的な推進力をもたらすそれは、太平洋中心付近から発進したアナイアレイターが十数分でロシアに到達する加速力がある

加速して僅か数秒でマツハに到達

ソニックウェーブを撒き散らし、海上を荒れさせながら一直線に突き進むそれは、ミサイルのようにも見える

実際間違つてはいない。彼はこれから忌々しい場所を消し飛ばすミサイルとなるのだから

詳細な目標はコリマ山脈を流れる川の下流付近に建設された強制収用所跡を利用し

た研究施設

もう誰も近寄らない場所なので、隠れて研究するには打ってつけの場所である

何故この場所を達也が知っているかと言うと、実験で一度連れてこられたからで、脳内の記憶チップがその場所と施設の設備を完全に記録していた

そしてその場所はもう目と鼻の先にある

オーバードブースを停止し、通常出力で接近する

ストライククローを展開して、突撃

隔壁を破って突入し、辺り一帯をビームカノンで制圧する

響き渡る警報は気にせず、怒りと憎悪のままにぶちまける。ガードメカや侵入者用のトラップは当然効く筈も無く、但虐殺の限りを尽くす

そこは地獄

むせ返るような血と硝煙の匂い

そこにじつと佇む復讐の執行者

生き残りは全て二重隔壁の向こうへ避難してはいるが、その体が消えるのは最早時間の問題

隔壁へと足を運び、停止する執行者

鎧が所々と開いて行く

開いた隙間から覗くのは緑光を放つ粒子

それはプライマルアーマーの中に充満していき、機体を覆う巨大な球体となる

僅かな閃光

それを合図に、爆ぜた

それは言うなれば”嵐”

全てを消さんとする緑光の嵐

周囲半径30メートル程を飲み込んでいく

溢れ返る緑の粒子と、爆発の橙色が絵画の如く美しい空間を作り出す

跡には何も残っていないに等しい状態だった

隔壁は消滅し、中に居た研究者諸とも消し飛ばした

残っているのは丸裸にされた地下施設だけ

階段を下つていき、最下層に到着したそこにあつたのは

12機の操り人形と懐かしい一機のプロトタイプだった

「Gビット……………アンフアングもここにあつたのか……………」

「起きろ……………」

FシステムとNシステムを起動し、目の前の人形を動かすイメージをする

精神波と思念波をNシステムが汲み取り、Fシステムへと流す

Fシステムがそれを電気信号へと変換し、Gビットへと送信する

この間、僅か1秒にも満たない

直後、12機のメインカメラが赤色に鈍く光った後、直ぐに緑色に変わる

初期起動が成功した証である

今、達也は実質13人となっている

フラッシュシステムとは当初、課題の一つであった機体の追従性能を上げる為に考案されたシステムだったが、完成してみるとPlus特有の高い反射神経と状況判断も相まって30%程度の補助で本人すら慣れるのに苦勞する追従性を獲得した。

余った70%をどう使うか。

試行錯誤の末、当時開発されたばかりのBT兵器に目を付け、そこから

「アナイアレイターに及ばずとも、通常時の基本性能の65%は出せる思念操作型量産機」

と言う課題の下改良が進められ、結果ニュータイプシステムと連携させる事で完成させる事が出来た。

その操作方法は独特で、自らの人格や思考パターンを他12機に投影し、そこから得られる情報を本体へと送り、情報を受け取った本体の思考を再度送信して動かすと言う、Plusで無ければ出来ない物となった。

又、操作中に自分の人格が複製される感覚が本体に強く届く為、まるで自分を含めた13機全てに自分が乗り、操縦しているように感じる。

「アンフアングは……回収するか」

一機のGビットが機体を抱えて空へと上がる

「…………アサルトアーマー起動…散開…」

その言葉に従い、残るGビット達は装甲を展開しながら散開し、施設を囲うように円

を作り上げる

言葉に出さずとも指示は出来るが、研究所に対する憎悪の気持ちだが、自然と達也に口を開かせていた

そして、再び地獄の嵐が産み出された。

辺りには何も残らず

山の麓は抉れ

地を焼いた

そこに似合わない綺麗な色彩

達也は機体を左側へ向けると、もう一つの目的の為に移動を始めた
それに習い、Gビット達も付いていく

同日 ロシア サンクトペテルブルク

達也はこの大都市に存在する銃砲店を訪ねる為にやってきた銃ならもうたくさん持っているだろ！

と思われるかも知れないが良く考えてみて欲しい

全て即時展開&即時発射可能か？

違うだろう

LMGにAMR、RLとGR

全てに置いて攻撃に少しの間が空いてしまう

これでは生身で追い込まれた時に何も出来ない
そこで、

12.7 m

装弾数は4発以上

取り回しが良い（達也にとって）

扱いやすい

これらの条件を満たすのは但一つ

（メタい話作者はこれ以外のロシア製を知らない）

R s h | 12 アサルトリボルバー

ロシア製大型回転式拳銃で

口径は12.7 m

装弾数は5発

取り回しも良く（達也にとっては）

マズルが下側でバレルウエイトが上の為、制御しやすい

カスタムパーツも以外と豊富

正にうってつけである

カランカランと気持ちの良い音と共に扉が開く

客が来たかと思つて店主が顔を上げれば、その目は見開かれた
無理も無いだろう

体格以前に身長が高すぎるのだから

「Ой」(おい)

「Да!」(はい!)

滑らかで、威厳のあるロシア語を聞いて椅子から飛び上がる

「Здесь есть РШ/12?」(ここにRsh-12は置いてあるか?)

「Да уолько что прибыл чотя цена высок
а」(はい、入荷したばかりで値は張りますが)

余りの恐怖にブルブルと震えながら答える店主に対し

「Нет проблем」(問題無い)

達也はそう答えると

コートの内側から500万ロシアルーブル

日本円換算で約750万の札束を差し出した

またもや驚愕に包まれる店主

「Это так хорошо? !!」(こんなに良いんですか?!)

達也がコクリと小さく頷くと

そそくさと準備を始め

奥から木箱一つと小さなアタッシユケースを持つてくる

木箱を開けると、梱包材に包まれた黒光りする新品の銃が姿を表す

手に取り、手触りを感じながらなめ回すように眺める

少しして、シリンダーラッチを押し込んで左へ振ると

シャキッ!

と良い音と共に弾丸の入っていないシリンダーが飛び出した

「Что с пулям?» (弾はどうします?)

「Подготовлено здесь» (こちらで用意している)

その言葉の通り、またもやコートの中から12.7mを五発取り出してシリンダーに
込めていく

数秒で込め終わり、コートの中にしまう

続いてアタツシユケースを開ける
中には

オスプレイサイレンサー

ロングバレル

L・A・M・f

3／22・可変倍率スコープ

可変ガンストック

等々

アタツシユケースを閉じると木箱も持って店を出ていく

そこからは早かった

サンクトペテルブルク近郊の森に待機させていたGビットを再起動させると、自らもアナイアレイターを纏い、パススロットに荷物をしまつて島へと帰る

アナイアレイターの接近を感知すると自動でハッチが開く
その中へ全機入ると、ハッチが閉じ、格納庫内の照明が付く

た
パススロットから荷物を取り出して自室へ行こうとすると、通路に背を預けた東が居











東は達也を見つけるなり、普段は見せない、怒った顔をしていた

「どうした」

「ねえ、何したの？」

顔の青筋を隠さず、ニッコリとした顔でそう問いかけてきた

ステータス

WB | 9900 | P | N | G | T | X | S a t e l l i t e : M k | III
 GビットタイプN /           搭載型

アナイアレイターと同じ装甲材質、システムを持つ操り人形
 N及びFシステムと達也によって制御される

分類上はBT兵器

識別反応もBT兵器として表示される

基本的な性能は通常時のアナイアレイターの65%程度。勿論リミッターが掛けられており、全解除すれば通常時の120%の性能を引き出す事が出来る

動力源 Hコジマエネルギー応用型核融合炉

ジェネレーター出力 計測不能

スラストー総推力 計測不能

装甲材質 ガンダニウムHcn

武装

頭部 9 m mバルカン× 2

腹部 1 2 m mマシンキャノン× 4

腕部装着型 2 連装コジマライフル

ハイパービームサーベル

アサルトアーマー

又、この機体は達也の■■■■■した■■■■■の地下に存在する■■■■■施設から送られる■■■■■を受信してエネルギー源とする■■■■■を搭載している。

たが、受信には■■■■■に存在する■■■■■を中継せねば■■■■■が出来ない

W B | 7 8 0 0 | Y | A C / F : D | U n f a n g

アンファング

動力源 コジマ理論応用型永久機関+Hコジマエネルギー応用型核融合炉

ジェネレーター出力 計測不能

スラストー総推力 計測不能

装甲材質 ガンダニウム合金

武装

頭部 9 mmバルカン×4

胸部 11・9 mmマシンキャノン×2

肩部自由稼働 14・2 mm対人掃射砲×2

プロト・フィン・ファンネル二基

ビーム・スマートガン

リフレクター・ファンネル二基

ビームサーベル二基

大腿部ビーム・カノン二基

メガ・ソニック砲

研究所が一番最初に開発した試作機

研究成果や当時の技術力の確認の為にコスト度外視で開発された機体

多くの武装を搭載する分、サイズは8MもありISとしては大きすぎる部類に入る
又、体に纏うのでは無く、コクピットが存在するので、コクピットに搭乗して操縦する形だった

武装も全て強力だが、この頃はまだプライマルアーマーが開発されておらず、コジマエネルギーによる攻撃は動力炉に直結しているビーム・スマートガンとメガソニック砲でしか使用できず、研究者達の目指した攻撃力も得られなかった為、永久機関と融合炉、データを抜き取ってロシア支部に保管されていた。

尚、機体名のアンフアングは”始まり”の意

コジマ理論応用型永久機関

関
呼んで字の如くコジマ粒子のエネルギー変換効率の理論を応用して完成した永久機

これは、荷電粒子と陽電子がぶつかり合つて起こる大爆発をコジマ粒子の収縮反応によつて抑え込んで吸収し、そこに一定の電圧を与える事で発生するエネルギーを回収。そのエネルギーの3/10を抑え込むエネルギーに回し、そこから同じ工程を永久に繰り返すことで成立する

普通であればたった3割のエネルギーではいずれ抑え込めなくなるが、爆発を吸収したコジマ粒子が収縮した状態に一定の電圧を流す事で得られるエネルギーは常識のそれを逸脱しており、たった3割のエネルギーでさえも十分なのである。

因みに、荷電粒子と陽電子を生成するのもそのエネルギーが賄っている

だが、この工程を行う機関は小型化したとは言え非常に大きく、最低でも6Mは無ければ搭載は出来ない

この永久機関は1機しか存在せず、現在は■■■■■に存在する。

止める方法は一定の電力を流した後、少しずつ電力を小さくする事で爆発と吸収のエネルギーを小さくしていき、いずれはコジマ粒子の消滅と同時に消える

因みに、これを6M以下でも搭載出来るようにデチューンしたのがHコジマエネルギー応用型核融合炉

これはウランの変わりにコジマ粒子を使用し、コジマ粒子に一定の電力を与える装置の役割をISコアが担っている

ISコアのエネルギーがある限り稼働し続けるため此方は半永久機関である

離れ離れの二人

「ねえ、何したの？」

開口一番のセリフがそれだった

束は非常に怒っている

それは誰の目にも明らかである

「アサルトアーマーで2つ目の研究所を消した」

冷静に淡々と答える達也

勘違いされないように言うが、別に今の束に臆している訳ではなく、いつもの調子である

むしろ、こころの中では

(こいつがこんな顔をするのは初めて見た……)
と、余裕に満ちている

「君、自分から教えてくれたよね？アサルトアーマーは核を遥かに超えるって」

「言ったな」

「何回つかった？」

「13回分だな……12回分は同時に」

束は開いた口が塞がらなかった

核を超える威力の物を今の世の中それだけ使えばどんな事になるか想像できなかつたのかこいつは

とそんな気持ちであった。

「今頃アメリカとか、IS学園とか、どうなってると思う？」

ふるふると、手を震えさせながら問いかける束に

「大パニックだろうな。核ではない…確認したことがないエネルギー反応だからデフコンは上がらない。だが核以上のエネルギー反応がロシアで確認された。まさに大騒ぎ状態だな」

ヤバい事を平然と言つて見せる達也に束の口が塞がらないのは二度目である

「良いの?!こんな事してたら、亡国だつて余計に警戒して出てこなくなるよ?!」

束の心配はもつともだ。

こんな危険な事があつて、ノコノコと出てくる筈が無い
だが、

「近々学園祭があるだろう…：奴らはソコで織斑とイレギュラーを、ないしISを奪うつもりでいる。此方もソコを狙う」

「でも、こんなことがあつたら

学園祭なんてやっている場合じゃない

そう言おうとして

「だからこそ学園祭をやるんだらうよ……生徒達と自分達の不安を少しでも減らせるようにな」

「……………」

その言葉に思わず黙ってしまう束

確かにもつともである

人間は極度の不安を感じると誰かと一緒に何かを成して不安を和らげようとする
誰かの感情では無く、それは人間と言う生き物の心理である

それは、今の束にも当てはまっている

「どうした」

無意識に、自分でもわからない内に束は達也に抱きついていた。彼を離したくなくて、一緒に居て欲しくて、また、愛して欲しくて、この不安を埋めて欲しくて

抱きしめていた

「……………2時頃……………部屋に來い……………相手をしてやる」

「……………うん……………ありがとう……………」

ドイツ ルクセンブルクのホテル
スイートルーム

「オータム、5日後に作戦を開始するわ」

金髪のスタイルの良いバスタオルを巻いた女性が、二つあるシングルベッドの内、窓側で寝転がっている同じくスタイルの良いレントイエローの髪の女性に話し掛ける

「ああ……」

小さい声で返事をするオータムと呼ばれた女性

「それはそうと、またダメなの？」

「…………ごめんなさいオータム、すこし、しつこすぎたわね」

「少し処じゃねえよ……」

「ごめんなさい…………おやすみ…オータム」

金髪の女性から静かな寝息が上がり始める

それを確認したオータムはYシャツの内側からペンダントを取り出す

小さなボタンを押すと、カチャ、と小さな音と共に開く

そこには、現在消息不明の彼氏との写真が入っていた

4年前に結婚を約束し、任務に送り出してからそれっきりの彼氏だった

写真を見つめる彼女の瞳が霞がかる

彼女はペンダントを握りしめ

「何処に……居るの………タツヤあ……」

撮影日 2010年9月12日

Tatsuya & Kate
mutual affection

オータム

ケイト・ローガン

1990年8月27日 イギリス生まれ

血液型 B型

身長 159・2

B86 (f75 / Fカップ) W69 H85

好きなもの

達也の好きなもの

達也がプレゼントしたペンダント&婚約指輪

嫌いなもの

達也が嫌いなもの

下半身でしか物事を考えないゴミ

女尊男卑に染まりきったクズ

性格は穏やかで少しだけ荒い

といった感じで、余程の事が無ければ荒れる事はまずあり得ない。

しかし

8歳の時、原因、首謀者不明のテロが発生し彼女以外の家族が全員死亡。シヨックで記憶を失ってからは、祖父母に養子として出される。

その後、順調な成長を続け、資格を取る為に17歳でドイツに留学した時に達也と出会った。

そのまま交際を続け、18で達也の方からプロポーズ。それを快諾した事で晴れてリア充となった

勿論初夜にヤった

それからは同棲を始め、それはもう幸せに過ごしていた。

達也と共にイギリスへと帰り、親に同棲といずれの結婚の許可を取り（勿論達也もドイツで両親に許可を取った）休暇まで間もなく、誕生日も近い為、来たら直ぐに式を上げるつもりで居たが

達也 23 歳

ケイト 19 歳

幸せは突然に破られた

ドイツ軍からの、消息不明との伝え

何処へ消えた

そう、伝えられた

それからの彼女らは酷いものだった

一晩中泣き叫び、辺り散らかし、誕生日が来たとなれば、酒を飲んで酔い潰れ、また
辺り散らかす

そんな生活を2年以上続けていた

そんな時だった

亡国機業と言う、元凶が彼女を誘ったのは

亡国機業構成員 コードネーム・オータム

絶望していた時、そこつけこまれて上手いこと構成員にされたケイト・ローガン

と言うのが他の構成員に開示させられている情報

確かに、つけこまれるように勧誘はされたが、条件付きで構成員となった

条件その1

何時如何なる時も自分を組織に縛り付けられない事

その2

ある人の自由搜索の許可、もしくはそれがしやすい部隊に配置する事

その3

気に入らない奴の命令は受け付けない

と、強引な要求な為通る事は無いと思われたが、達也の進めで厳しい訓練を受けていたケイトは最高責任者の側近とガードを全員抹殺

ISなんぞ無くとも何時でもお前を殺せると示した事で許可された。

性格面は以前とは真逆になっている

達也を失った事で弱くなった心を隠す為に口調は俺

気性は荒くなり、それでいて冷徹で残酷

目的の為ならば手段は選ばず、どんな事をしてでも達成する

使用機体はフランスの共同開発組合から強奪した試作機、アラクネ

彼女好みの改造が施されており、多脚とそれに搭載されているサブアームとマシンガンによる弾幕戦を得意としていた機体が、サブアームを機体固定用に改造し、メインを180mm大型マガジン式エネルギーガスナイパーカノン、サブに高周波ブレードと武装を限定した一撃必殺型になっている

又、本人が紫色を余り好まない為、カラーは真つ黒に薄く白いラインが入った物に変更された

アラクネ・S&D

オータムことケイトが使うIS

世代 試作第三世代

設計 フランス共同研究開発組合

元は、フランスの大手企業のデュノア社が誇る実弾による武器の取り回しの良さを最大限發揮する為に、ラファールをベースにした試作機

完成まで後少しと言う所でオータムに強奪された

その後、亡国機業の手で改造が施された物をさらにオータムが改造した。

多脚を活かした高い機動力で迅速に狙撃地点へと移動し、速やかに狙撃態勢へと移る事が出来、本人の腕と合わせれば正に敵無し

武装

縦列二連装180mmマガジン式スナイパーカノン

縦2つの銃口を持つ大口徑スナイパーカノン

上下それぞれが別の役割を持っており、下側が貫通力の高く、上側は破壊力の高いエネルギーを射出する

下で対象を貫通させ、間髪いれずに上で内部から破壊する、と言った中々にえげつない戦法が出来る

高周波ブレード

腰に装備している

刃渡り90cm程のブレード

実力は亡国機業内では間違い無く最強

学園祭

IS学園

そこでは絶賛

学園祭の最中であつた。

校舎の中では嬉々とした雰囲気立ち込め、その脇に建てられた城のような物からは何かを奪おうと必死になる者達の雰囲気蠢いている

勿論、校舎の外でも学園祭は行われており、屋台だのなんなのが乱立しているし、1000人近い生徒の半分はうじゃうじゃしている。

その中で異様、只ひたすらに異様

その原因は勿論、束の横に立つ達也のモノである

背中には大きな箱を背負い、楽器ケースより二回り程大きなケースを手に持ち、顔は

フェイスギアで隠されている。

何よりその身長が一番であった

この学園の誰よりも背が高いので、必然的に視線が集まってくる。東が隣に居るのもあるだろうが、一人でもそれはほとんど変わらないだろう。

「ここからは好きないようにさせて貰う。口を出すな」

「分かっている。大丈夫だよ、もう私は何も言わないから」

努めて冷静に話し掛ける達也のその口は、三日月のように歪んでいた。

時を同じくして城の中

正しくはお城セットの控え室謙ロツカールーム

「ここなら、見つかりませんよ」

スーツを着たレントイエローの髪の女性
オータム

彼女はいましたが目的の為に織斑一夏を引きずり下ろしていた

「はあ、はあ、ありがとうございま…って、何で巻紙さんがここに?!」

巻紙礼子

今回の作戦における偽名だった。

「いえ、貴方の白式を頂こうと思ひまして。出来ればお友達のリリーダムも、ね！」

一切大きな声で言葉を切ると同時に、呆けている一夏の首を掴み、後ろのロッカーへと
投げつける

「ガァー……………あな…た、は、一体…………」

そんな台詞を吐いた一夏へオータムは、

「そんなお約束みたいなセリフでも吐いたら教えてくれるとでも思ってたのか？ガキ」

相手に白式を起動させる時間を与えるわけには行かない。オータムは即座に多脚部のみを展開し、一夏を押さえ付けるが

「白式!!」

一夏が叫ぶと同時に、強い衝撃波を伴って白式が出現した。

「ブースト・オン………ちっ」

ブースト・オンとは

拘束、もしくはそれに準ずる状態によってISを展開出来ない。そんな状況に対応できるように全ISコアに搭載されている機能で、エネルギー衝撃波を機体周辺に撒き散らす事で拘束を物理的に排除して展開する事。

ならばと、オータムもアラクネを展開する

これだけの近距離でスナイパーは意味を成さない。だからこそその拘束であったが、この狭い所でブースト・オンを使う程バカだとはオータムも思つて居なかつた。

擬似的とはいえ閉鎖空間で強い衝撃波なんぞ使つたらどうなるかさえ理解できないのかと

頭の中でオータムはそう思っている

だが、そんなことを考えている余裕は無い。

運が良いのか、今のところロツカーが吹き飛んだ以外の損傷は部屋には見当たらないし、いくらサポートが付いていると言つてもこれは想定していない。かと言つてこの状況で離脱しても悪い方向にしか行かない。

ならば、どうするか。答えは一つ

目の前のバカを殺してでも白式を強奪する

スナイパーキャノンを格納し、腰から高周波ブレードを抜く

グリップに内臓されたモーターとそれによつて高周波振動を起こす刃の震える音が
ルームを支配した。

ロツカーが倒れる

その音が、合図となつた

飛び出したのはやはりと言うべきか白式

雪片を上段に構えてアラクネに向かう

対してアラクネは下段に構えていたブレードを即座に上へと引き上げ横に構えると、
そこへ雪片が衝突する

まだエネルギーブレードが展開されない内に勝負を付けなければこちらが更に不利
になる。

実体のある刀と実体の無い剣

ましてやモーターによる振動なのだからエネルギーブレード相手につばぜり合います

ら出来ない

そもそも何故狙撃型のアラクネが近接特化の白式の相手をしなければならぬのか。改造前であればクモの巢があるし、多脚にプラスマブレードがあつた

だが、今は無い

あつたとしても狙撃するのにクモの巢を張る時間は取れないし、そもそも近寄られる前に殺すからブレードの出番も無い

つくづくオータムとアラクネS&Dには向かない任務である、が、命の恩人の頼みを断れる程オータムは荒れてはいなかった

荒れ果てて生きる気力を失っていた自分にチャンスをくれたのは紛れもない亡国機業とスコールと言う女性だった。その命の恩人のたのみなら一つくらいは聞いてやるかと、そう思つて受けた任務がこれ。嫌がらせにしか見えなかった。

(あとで文句付けて報酬2倍にさせてやる)

自分がその原因を作つた事を忘れているらしい

話を戻し戦闘へ

今のところはオータムが押しではいるが、

一夏がエネルギーブレードを起動すれば間違い無く劣勢に持ち込まれる

そこには技量では覆せない相性と性能差がある

先も言ったが、実体のある刀と実体の無い剣

勿論実体の無い剣が勝る

(なら………こいつを使うしかねえか。考えてみれば向こうの方が相性が良い。Mも居る事だし、出し惜しみ無しで行く！)

オータムがパスロットから取り出したのはISリムーバーと呼ばれる装置

専用機を操縦者から無理矢理引き剥がす物で、使用すると操縦者との接続部分に干渉し、引き剥がそうとする

その間、操縦者は激しい痛みに襲われる

元々はもう一人の為に使うはずだったが、向こうは射撃型故、相性が良く比較的簡単に片付く。ならば、こちらで使うのが一番良い。

背部のカスタムウイングを展開してイグニッションブーストを使ったタックル行う。

急なブーストにさすがの一夏も反応が出来ずもろに喰らってしまふ。一瞬の隙。だが、リムーバーを取り付けるだけならその一瞬で十分だった

それを一夏の腹に押し付けると、四隅からベルト状のモノが飛び出して一夏に巻き付いていく

腹を完全に覆った瞬間

「ああああアア?!！」

一夏の体にプラズマが走った

ISコアとの拒絶反応によって放出されているエネルギーがプラズマ状に変化して一夏の体を襲う

あとは待つだけである

「私のお気に入りに随分とヒドイ事してるのね」

邪魔が入らなければの話であるが

悪魔

「更職楯無、生徒が危機に瀕してるのに随分と遅かったな」

ロツカーの上に立つ女性に向けてオータムはその言葉を放った

「あら、貴方がここの監視システムを全部落としたからでしょ？お掛けで上の皆は気づいてないわ」

「じゃあ、どっちにも好都合でどっちにも不都合だな」

オータムにとつても楯無にとつても、上に気付かれて居ないのは好都合と言えるがどちらにとつても、気付かれないうちに目の前の仕事をこなさなければならぬ。

迅速に、確実に

下手にこれ以上の騒ぎが起きれば気付かれて全てが水の泡になってしまう。

これ以上の騒ぎが起きなければの話であるが

「どっちにしてもよ」

「何?」

「そろそろ本人が出てこいよ」

オータムが気付かれる事無くノーモーションでブレードを投げる

反応出来ず……いや、反応せず

ブレードは寸分変わらず楯無の額を貫いた

「あら、良く気付いたわね」

オータムの後ろで楯無I Sを纏った状態で何処からともなく現れた

「何を言うのにも眉一つ動かない。オマケに鼓動も無いと来た。バレバレだつづうの」

オータムは反対側に飛び退き、人形に刺さっているブレードを抜くと、楯無の形をしていた何かは、ドロリと崩れて楯無の元へと集まっていく

「アクア・ナノマシン……厄介な…」

「このミステリアス・レイデイの特権よ。フフ」

集まった水が楯無を覆い万全の防御態勢を取る

「とつとと……」

決着を付けねえと

そう言おうとして遮られた

鍵を閉めた扉を蹴破る音に

入ってきたのは、大男

長身で、背中には大きすぎる箱を背負い、手にはこれ又大きすぎるケース
全身コートに包まれ、顔はフェイスギアで隠している。

男は

「見つけた……………」

ギアの内側で狂気の笑みを浮かべながらケースを落とす

落ちたケースは火薬の爆発によって固く閉ざしているロックを破壊し、蓋が吹き飛んだ箱の中からせり出して来たのはバルカン砲

F115等の戦闘機に搭載されている20ミリのガトリングガンである

それを左手に持ち、右手で箱下の小さいカバーを開くと、給弾ベルトが飛び出す

それをガトリングの後端部に接続した

そして右手に持ちかえると、

六本の銃身がカラカラと音を立てて回り始める

最早隠しきれない程の轟音が間も無く響き渡る

楽園を地獄へと変える憎悪に満ちた咆哮

知らない人間などお構い無しに、只自分の目的を果たすためだけに、叫びを上げる

悲しみと絶望と、怒りと憎悪と、嘆きの叫びを

ヴオオオオオオオオオオ

咆哮に等しい音量で放たれるのは勿論弾丸である

およそ生身の人間が扱えるハズの無い代物をこうも容易く扱って見せる男にオータムはある疑問を抱いていた

(あいつの声……イヤそんな……)

「見つけた」

たった一言

この声色を何処かで聞いていた記憶がある

記憶の中にある声色とその声色に間違いは無い

が、記憶の中の声の主は、これ程背は高く無いし、あんな筋力も無い

しかも攻撃されているのは楯無や一夏では無く、自分である

もし、あの男が”彼”であるならば私を見て攻撃等しないハズ

確かめたいがこの状況

何とか隠れては居るが、見つかるのも時間の問題

だからと飛び出すモノならそれは命を捨てるに等しい行動と言える

いくらエネルギーシールドと言えど、20 mを完璧に防ぎきれる程の物ではない
このまま瓦礫に隠れていても何時かは捕捉される。ならば、と

オータムはアラクネの脚部ユニットを分離させ、自律制御で男へと向かわせる

その隙に扉へ向かって走る

後方で爆発音

足止めしていられる時間が想定以上に短かったが、十分だった

ノブは目の前に、手が届く距離にある

それに手を掛け、ひねり、空いた隙間に滑り込む

一瞬後、自分の後ろで瓦礫が崩れる音がした

「逃がした………か」

達也はオータムが放った多脚ユニットに気を取られて一瞬とは言えオータムを見失ってしまった

狭いロッカールームならば、一瞬でも気を引ければそれで十分なのである

もし達也がユニットを無視してオータムを狙えれば始末は出来るが、自分も手痛いダメージを貰う事になる。いくらナノスキンがあると云っても、即日再生では無いし、何より、捕らえると言う一番の目的が果たせなくなる

(まだ学園内には居るはず、出来ればここで捕らえたかったが、仕方ない)

達也はガトリングと弾倉をパススロットに仕舞おうとして、二人の存在を思い出す。

更識楯無と織斑一夏

一夏の方は意識を失っているが、勿論楯無は健在

(邪魔になるか…)

「悪いが」

ガトリングと弾倉をパススロットへと戻し、

アナイアレイターを展開する

「男が?!それにその機体!」

「ここで死んで貰う」

リミッターを第三段階まで解除し、二段QBを使用して急接近を掛ける

ここで生かしておけば、必ず後で脅威になる

今の内に邪魔者を消しておけるのは達也にとって好都合だった

容赦無く大出力ビームサーベルを展開して振り下ろす。そこに情けは一切無い
アクア・ナノマシンによる厚い防御幕が敷かれるが、ナノマシンと言えど所詮水
ビームの圧倒的熱量の前に防御に用いたナノマシン全てが蒸発した

「のー」

言葉から焦っているのが簡単に分かった

無理も無い。オータムを捕まえて終わりと思っていたら突如として乱入してきた達也を相手にする事になってしまったのだから。

はつきり言つて今の楯無とミステリアス・レイデイでは勝ち目は無い

嘘でもなんでもなく、100%勝てない

技量云々の前に、性能差が酷い

ISコアのエネルギーとコジマ粒子によるエネルギー

得られる量も力も桁違いなのだ。比べることすら鳥澁がましいと言うもの。

楯無が避けようとすれば、まるで分かっていたとしても言うようにその先へと攻撃が飛んで来る

コア・ネットワークで呼び掛けようにも、その暇すら与えてくれない。

余計な事を頭に入れる事は許されない

全身全霊を持って当たらなければならぬ。

迫り来るカノンをアクア・ナノマシンで防いで行き、相手を誘う
全ては切り札を直撃させるため。

アクア・クリスタルをフル稼働させ、必要なナノマシンの量を稼ぐ

表面のナノマシンが全滅すると同時に突っ込んで来る

(狙い通り！)

量は十分

後は直撃させられるかどうか

持ち前の間隔を活かして最適なタイミングを計り、

(……！)

生成したナノマシンを全て槍の前方に集中させ

穿つ

タイミングは完璧だった

狙いも

戦術も

だが、それでも

目の前の悪魔には及ばなかった

放った槍とナノマシンは、全て緑色の球体に包まれている
だんだんと小さくなっていき、やがて、消えた

「嘘……………」

ミストルテインの槍

全てのアクア・ナノマシンを集中し、攻性転換する事で強力な攻撃とするもの
その威力は最大で気化爆弾4個分に相当する
要は劣化版アサルトアーマーである

アサルトアーマーには遠く及ばないが

絶望して膝をつく

そこへ容赦無く振るわれるビームサーベル

エネルギーを全て失ったミステリアス・レイディは形を保てなくなり、待機形態へと戻る

ISスーツのまま呆然と膝をついて虚空を見つめるその姿にいつもの覇気は無かつた

「お前は邪魔になる。死ね」

クローアームで楯無の頭を掴み、

握り潰した

アナイアレイターを待機形態に戻し、ガンホルダーからR s h—l 2を取り出し、弾丸の確認をする

5 発

しつかりと装填されている

確認を終え、ガンホルダーに戻した瞬間

「!!……………くっ……………」

急な頭痛に襲われた

「また……………残留……………思念……………か……………くう……………あ”あ!”」

痛む頭を振り、壁に叩きつけると、段々とその痛みが引いてきた

変わりに、壁に亀裂がはいり、フェイスギアが割れた

「ちっ……………」

達也は、いい加減これに慣れなければ

そう思った

忘却

「逃がすか………！」

学園の校舎二階では現在進行形で銃撃戦が起こっている

M279を使う達也とVZ61スコーピオンを使うオータム

事の発端は校舎三階において、生徒でガヤガヤしている所へ紛れていたオータム目掛けて達也がリボルバーを撃った事だった

当然、周りの生徒達はパニックを起こして逃げ出し、教師部隊が鎮圧に掛かろうとしたが、エネルギーシールド干渉弾を使用され、出てきた教師部隊は一人残らず撃ち殺されていた。

専用機持ちは何をしているのかと言えば、外にオータムのサポートであるMが居るた

め、校舎に突入出来ないでいる。

「なんで！なんでお前が！」

叫ぶのはオータム

ギアが無い達也は当たり前だが素顔丸出しである

オータムが将来を約束した人の顔を見間違えるハズはない。実際に合ってはいるが、記憶が消された達也にとっては自分を油断させるための戯れ言にしか聞こえなかった。

「私を忘れたの?!」

「黙れ……貴様の事等記憶に無い」

そのままLMGを撃ちながら横にグレネードランチャーを構え発射した。

ポンツ、と気の抜けるような音と共に榴弾が発射され、山なり弾道のそれは障害物を越えてオータムの後ろ側に着弾した。

後ろから爆風に煽られるのを防ぐ為に身を縮め、防御態勢を取った
それ故に前からくるもう一つの榴弾に気付けなかった。

「ああ?!」

盾にしていた障害物ごと吹き飛ばされ、瓦礫に埋もれた。

36分の攻防の末、勝利したのは達也だった。

「手こずらせる……」

グレネードランチャーをコートにしまい、瓦礫を退けた

「ガッ……ゲホッ、ゲホッ……ハア……ハア……ハア……タツ……ヤ……」

「……………そのセリフは

聞き飽きた

そう言おうとして、

「あんたかあああああああ！」

達也と同じ、怒りと憎悪に満ちた咆哮が聞こえた

「織斑一夏！」

そこには、白式を纏った一夏がいた

その機体は姿を変えており、各部装甲とウイングは大型化、雪片からはエネルギーブレードが常時展開されており、左腕も形状が変化している

「二次移行したのか……厄介な！」

あれでは干渉弾も迎撃される

そう考えた達也は、機密保持を考えずアナイアレイターを展開した。
でなければ勝てない。

そう判断した。

二次移行したISの性能は未知数であり、舐めてかかれば命は無い

「お前がぁ！楯無さんを!!」

従来の白式では考えられない速度で接近してくる。

反射的にビームサーベルで受け止めるが、左手の部分が光つたのを気付く事が出来ず、掌部のビーム砲を諸に受けてしまう。

躊躇している暇は無い。目の前にやつと目的のスタートラインがあるのに、今諦めることは出来ない。こいつを殺す！俺の目的の為に！

その考えの下、叫んだ

「全リミッターカット！」

急速に広がっていく視野

回転の早まる頭

遅くなつて行く世界

下段からの切り上げに対し、QBを伴った蹴りを喰らわせる事で避け、QBを前方に集中して回避。

すかさず機体を固定。三ヶ所の装甲を展開しソニックスマッシュ砲を起動させ、最大出力で放った

天井も、壁も、床も前方の何もかもが消滅した。

が、一夏は、白式は健在。

ソニックスマッシュ砲を放った瞬間、一夏もスラストターの出力を最大にして天井を突き破り回避していた。

「チイツー！」

達也は後悔していた。何故、あそこで奴を殺さなかったのか。意識を失っている間に頭を潰すだけで良かったのに。

何故そんな簡単な事をしなかった。

後悔を頭の隅に押し留め、意識がさらに先鋭化した

スピードはこちらが圧倒的に上。攻撃力も圧倒的に上。では防御力は？
此方が下

いくらPAと言えども、触れたエネルギーを消滅させる零落白夜には叶わない。
ではやるべき事は？

所見殺しによる確殺。

相手が仕掛ける前に、叩く！

背部のOBを焚き、空に上がった瞬間、OBへのエネルギー供給を切り、その有り余った余剰エネルギーを持って二段QBを掛けた。

OBの起動を確認していた一夏は当然の如く突っ込んでくると予想していた。
が、違った。

上空へと躍り出た瞬間OBをカット。そのまま理解不能な軌道で後ろへと回る。

目の前で、理解するには数分の時間を要する現象を目の当たりにした一夏の背中が
ら空きだった。後はそこにサーベルを振り下ろすだけ。

しかし、それを許さないイレギュラーが居た。

WARNING! WARNING!

敵機急速接近! 機数1

機体名: フリーダム

世代予測: 試作第四世代

眼前のディスプレイの情報を見た一瞬後、QBで後退する。達也がいた場所にはピンク色の剣があった。

「蝶をやつと墜としたと思えば次は悪魔ですか」

「また邪魔をするのか……イレギュラー」

「おつと……男……貴方もですか」

フリーダムの操縦者は達也を見下すようにその言葉を放った。

REMEMBER ME

「また……邪魔をするのか、貴様」

「貴方がここまで被害を出さなければ私も来なかったかも知れないですよ。ですが、さつきまで親しかった人達が殺されて、黙っていられるとでも?」

シールドで胸部を隠しながらビームライフルを向けるフリーダムの操縦者たる海斗の目には、怒りの炎が宿っている。

「最後の警告だ……邪魔をするな」

「断る!」

ハイマツトウイングを全開にして飛びかかってくるフリーダム。

対し、

「そうか。なら

——消えろ——イレギュラー——

輝度を増す朱^{あか}き目から残光を引かせながら動いた

ビームライフルによる牽制でアナイアレイターを抑えようとするが、PAがそれを無意味にする。

それを見て射撃戦では埒が明かないと判断した海斗はライフルを捨て、左側のサイドスカートからビームサーベルを抜いた。

左手に持つラミネートシールドで半身を隠しながら相手を見極める

二段QBによる急制動が描き上げる直接的な軌道

それを見極める。海斗の頭の中でその言葉が反響した。

—— 相手を直視する ——

マツハを超えた機体を急停止させた挙げ句そこから一瞬でもう一度マツハ超えまで再加速する。その瞬間の直線。
それを見ろ

見て、未来^み予知ろ

(！)

「ハアツ！」

相手が再加速をかけ此方に来る一瞬前にタイミングを合わせてサーベルを振り下ろした。

拮抗する二つの刃

緑光と白桃色の×字を中心にして発せられる閃電

「何故！貴方はこんなことをする！」

限界を迎え、お互いに離れ、再び激突し合う

閃光の中で言った

「貴様に言う理由はない！理解されたくもない！」

空いている左腕にビームサーベルを握らせ振るう

それをシールドで直接押さえつけるフリーダム

「こんなに大勢の被害を出しながらでもやりたいのか！貴方は！」

フリーダムが頭部のバルカン砲を放つが、装甲強度が高すぎるアナイアレイターにはかすり傷しか付かなかった。

「これ以上の惨劇を俺は見た！それに比べればこんなことは！」

脚部をアトミックシザーズで捕まえ、ゼロ距離で装甲を展開、ソニックスマッシュ砲を発射した。

当然吹き飛ばされるフリーダム。壁にもたれ掛かり、何とか立っているものものそこへ、

「子供の遊びに過ぎん！」

無情にも大出力ビームサーベルを落とした

切り裂かれるエネルギーシールドと装甲。断面から溢れだすオイルが損傷の悲惨さを物語っている

それ以降、動く事はなかった。

「お前ええええええええ!!」

短く、余りにも激しい戦闘に見ている事しか出来なかった一夏の怒りは相当だった。

自分の技量の低さ故に失ってしまった先輩

自分が見ている事しか出来なかつた故に倒れ伏した友人

そして、それを為した張本人が目の前に居る

「うあああああ!!!」

半ば獣の咆哮に近い声を上げて無防備に迫り来る一夏を前に、ビームサーベルを突き刺そうとした

した

———
ねえ、何でコロシタノ？
———

頭の中に——雷が落ちた

——ナンで、男がアイエスに！——

頭の中に——稲妻が走った

——ドウシテ？私ガ？——

頭の中で蠢いているのは

ナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナン
 デドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウ
 シテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナ
 ンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデ
 ウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテ

ナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデ
 ドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシ
 テナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナン
 デドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウ
 シテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナ
 ンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデド
 ウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテナンデドウシテ
 ナンデ

ナンデ？ドウシテ？

ワタシハ——アナタニ——ナニモシテイナイノニ

一夏は容赦の欠片もない刺突をした。

心臓から突き出る光の刃

流れ出る血液

消えていくアナイアレイター

視線の先に居る女性

——無意識に——手を伸ばしていた——

——知るハズの無い女性——

なのに、自然と頭の中で記憶が落ちてきた

——ねえこつち！タツヤ！これ買って！——

——タツヤ！次はこれが良い！——

歳相応の無邪気な女の子

——ん…………スキ…………タツヤ——

——キス…………キス！——

夜を共にした妖艶うつくしいな女性

知らないハズなのに知っている

——手を離さないでね?——

だから——無意識に手を伸ばして——

——その名前を呼んでいた。

「……………ケ……………イ……………ト」

消え入りそうな小さな声で、彼女を——呼んでいた

記憶

いつだったのだろうか——人を殺す事に何の感情も抱かなくなったのは。

もう——それすら憶えていない——

大半の事は——忘れてしまった。

自分を産んでくれた両親を覚えていない。

自分の側に居てくれた女性を思い出せない

——
違う——

憶えている

憶えてはいる

でも、覚えていない

彼女は 黒いモヤ に、隠れてしまつて見えない

—— 多分 —— 夢の中ですら、彼女を想像出来なくなつてしまつたんだと思う

声は憶えている

声は憶えてはいる

でも、姿は覚えていない

——だれか——たすけて——そばにいて

そう——思ったが最後

意識を失う直前に見たのは

何かに縛られながら泣き叫ぶ

■^ケ
■^イ
■^ト
だつた。

私が彼と出会ったのは、運命だと思う

だって、こんなにも私を解ってくれる人が運命の人で無い訳が無い

家族が皆死んで、一人ぼっちになった私に、彼は手を差しのべてくれた。優しくして——暖かい手だったのを、今でも覚えている。そこから、まるで生娘みたいに彼に恋をした。いや——みたい、じゃなくて、生娘だった。

そんなある日、彼の過去が知りたくなつた。だって、自分の過去だけが知られているのは不公平だ。

彼も私と同じだった。私よりも若い時に両親を失っていた。彼は両親が病氣の中生まれていた。結果、母は無理な出産で身体が耐えきれず死んでしまい、父も後を追うように病死してしまった。

なんで、彼は平然としていられるのだろうか。私は彼のお陰でここまで来れている。けど、彼には誰も居なかつた。

彼は「軍人だから」と答えた。何もかも忘れようと訓練に勤しんでいたら、逆に忘れられずここまで来てしまったと言っていた。

なら——今度は私が助ける番——彼を私が助けないと——

でも、その時は一生来なかった
ドイツ軍から届いた一通の手紙
そこに書かれていたのは、彼——
タツヤのM I A^{作戦行動中行方不明}だった

酒に溺れて二年。部屋中に散らばったビール瓶とアルミ缶が自分の凄惨さを物語つ

ている。

そんなゴミ屋敷の中でも、輝いている只一つの大事な物。壁に掛けられてあるウエディングドレス。

彼との永遠を約束する式に必要なだった物。

けど、その彼はもう居ない。

世界を、全てを憎んでいた。

I S、軍人、軍、女尊男卑、篠ノ之束、全てを憎んでいる。

だからこそ、あの亡国機業の誘いに乗ってI Sを手に入れた。いつの日かあの元凶を殺すために。そしてら——私も彼の後を追う。

追おうと思っていたのに。

目の前に居る人は——死んでしまったと思っていた人で——私の事は覚え
ていなかった。

呼び掛けても、彼は私を殺そうとしてくる。

戦闘中に意識を失って、次に目覚めてみれば

私の愛する人は、心臓から血を流しながら——私を呼んでいた。

脱出

霞みが掛かった意識が、晴れていく。

何処かの部屋に居る

……………俺は心臓を貫かれて死んだはずでは——ああ、そうか、ナノスキンか。

部屋の眩しさに目を細めながらも開けていく

開眼一番に視界に入ったのは、織斑千冬プリユンヒルデだった。確か——東の親友だったか

「目を醒ましたか、貴様」

隠す気等無い殺気。あの日俺が抱いたモノに比べれば小さなものではあるが、それでも常人であれば尻尾を巻いて逃げ出すであろう気配がある。——それだけだが。

「妙な気を起こすなよ、貴様は幾つもの鎖に繋がれている。抜け出す事は出来ん」

言われて視線を移せば、確かに全身鎖まみれで身動き一つ取れない。外の森にGビットを待機させては居るが、ISが奪われている今、フラッシュシステムが使用不可では起動すら出来ない。

「……………俺のISは」

「フン……貴様のISは既に研究所に送った。残念だったな、貴様があれを使う事は金輪際なくなつた」

万事休す……………か……………どうするか。此処でこの鎖を引きちぎる事も出来る。だが、コートも脱がされ患者服しか着ていない今、流星に素手ではどうにもならない。ナノスキンを攻撃に回せば行けるが、それでは最悪死んだ時に回復が追い付かない。一先ずは様子見に徹するしかないらしいな。

内臓レーダー起動

頭の中に映し出されていく細かなフレームマップ。この学園の構造はこれで全て把握出来た。後は

「俺はどうなる」

「今から30分後にI S委員会の研究所へ引き渡す為の迎えが来る事になっている。後は知らん」

30分

その時間で脱出出来るか? ……無理だ。この女はこの部屋を離れないだろう。仮に離れても代わりが来るハズ ……ならば、後は関与しないのであれば、最後の希望は引き渡し後の護送車の中しかない。

「ああそうだ ……一応言つて置くが、研究所の道中で逃げても既に貴様は有名人だ。完璧には逃げられないぞ」

読まれるのは当然 ……束に連絡が取れば後はそれで良い。そうすれば、研究所に赴いてアナイアレイターを奪還してから焼き付くすだけだ。それに、存在が露呈したのならそれはそれで好都合だ。アサルトアーマーを使うのに躊躇が要らなくなった。捕まった事との引き換えと考えれば十分すぎる収穫だな ……

そこまで考えて、事は起きた

「何だ?!」

突如として響く爆発音。続いて聞こえる警報

『未確認兵器の侵入を確認！生徒は速やかにシエルター内に避難！残存している教師部隊は……なっ！——ギヤアアアあああああああ！！！！』

耳に響く嫌な音を頭の片隅に無理矢理押しと留め、レーダーとUIを起動した。

識別コード確認 ナンバー提示

AC | 203 / C · N · | N I N E | B A L L

機数 | 12 機

友軍として登録。

通信確認、救助です。

最後の文章が表示された瞬間、隣の壁を突き破って5メートル程の機動兵器が姿を表した。

カラーは赤をベースに所々が黒く、センサーは青色

そして、

『ターゲット確認——救出対象——障害を確認——排除確認』

無機質な声質のマシンボイスが放った言葉を理解出来ない千冬ではない。向けられたパルスライフル

を自分の手でギリギリ逸らし、懐に飛び込む

そこで、念のためにと装備していた打鉄を起動し、近接ブレード葵を横一文字で振るった

が

「チイツー！」

機動兵器の左腕のカバーが開かれ、レーザーブレードが起動される。それを葵に向けつつばぜり合いの要領でぶつけられ、そんな事等おきずに葵が切断された。

腕を降ろし、今度は左肩の武装を展開させた。折り畳みの長い砲身が展開され、距離20と至近距離でそれを放った

凄まじい爆発と共に部屋が崩壊し、織斑千冬も気絶している。抜けるなら今。そう判断し鎖を引きちぎって外へと出る

学園の外へと出れば、膝ま付いて待機している同型の11機。

『トレーラーが用意されて居る。乗れ』

簡潔に、そう説明されれば、乗るしかなかった